



研究だより

佐賀県立唐津特別支援学校
令和6年3月15日発行
研究部 第3号



全校研究主題 子どもが主体的に活動する姿を目指した授業づくり
～一人一人の「できる状況づくり」と各教科等の視点をふまえて～（1年次）

寄宿舍研究主題 子どもの主体的な活動と育ちにつながる生活づくり
～人とかかわりの中で豊かな心を育みながら～（1年次）

第3号では、2学期以降の取り組みと今年度の研究のまとめを紹介します。

公開全体授業研究会を実施しました（11月28日）

提案授業：小学部知的障害学級2・3年生

生活単元学習「たなをつくろう～ぐんぐんきょうしつだいへんしん～」

協議の柱：①事例対象児童の様子に合った、具体的なねがいを立てられていたか。

②ねがい達成できる手立て（できる状況づくり）がとられ、主体的に活動できていたか。

講師：西九州大学子ども学部子ども学科 准教授 久野 隆裕先生

研究会当日は、外部参加者（5名）と各学部の職員を交えたグループで柱に沿って協議を行いました。それぞれのグループで『自立活動の指導のねがい』と個人のねがいがどうつながっているか「よりよく活動するためにはどういう手立てが考えられるか」などの話題で盛り上がり、充実した協議になりました。その後の全体協議においても、各グループで出たアイデアを共有したり、授業者が質問に答えたりするなど、よりよい授業の在り方について深く考える機会になりました。

久野隆裕先生による指導・助言では、小学部の低学年段階では、活動自体が楽しい！と思えるようにすることが大事であることや、「自立活動の指導のねがい」は、困っている様子（椅子に座れない、みんなと一緒に移動できない等）の背景（なぜ？）を考えて、背景が読み取れるねがいになるように表記の仕方を工夫するとよいことをご指導いただきました。この他にも、全体協議で出た話題にも触れながら、手立てや授業の展開等についてもご指導・ご助言をいただき、多くの学びがありました。



各学部で行った授業研究会の紹介

『授業計画シート（指導略案）』と『個人のねがい・評価整理シート』を使って授業研究会を行いました。

小学部

◆9月単元（9月14日）

肢体不自由Ⅱ課程 2.4.5.6年生
生活単元学習
「わくのびびじゅつかん」

事例対象児童の個人のねがいや手立て、含まれる各教科等の内容について学部職員でじっくりと話し合う機会になりました。また、『個人のねがい・評価整理シート』の記入方法についても協議することができ、次の実践へつながるものとなりました。

中学部

◆12月単元（12月26日）

知的障害学級2年生
生活単元学習「にじきら工房～エコバッグを作ろう～」

事例生徒の目指す姿や手立て、評価が適切であるかを考え、共有することができました。また、他学年、他課程の取り組みに触れることで、授業づくりの考え方や手立てについて改めて考えていくきっかけとなりました。

高等部

◆12月単元（12月14日）

知的障害学級2年生
生活単元学習
「科学の仕組みを知ろう」

まとまりのある単元計画になっているのかについて協議をしました。一定期間テーマに沿って、活動を継続していくことで、生徒が見通しを持ち、明日の活動に期待感をもって、生活できるようになるということを共通理解することができました。

1年次の成果(○)と課題(△)

- 全学部が『生活単元学習・遊びの指導・作業学習の授業づくりの進め方』に沿って授業づくりをしたことで、「各教科等を合わせた指導」において本校が大切にしている考え方についての理解が深まりました。
- 授業づくりの際に、単元のねがいに含まれる主な各教科等のねらいを考えたり、『個人のねがい・評価整理シート』を作成したりしたことで、個別の指導計画の「自立活動の指導のねがい」を確認する機会が増え、授業の中で意識することができるようになってきました。また、学習指導要領解説を読む機会が増え、各教科等の目標や内容を理解して授業づくりに取り組もうとする姿勢が見られました。
- △「できる状況づくり」については、『本校の教育』に掲載されている要点を、年度初めや授業実践の折に確認するようにしました。今後はより実践に生かせるように、事例を挙げたり、グループワークをしたりするなど研究会の内容を工夫していきたいと思います。
- △『個別のねがい・評価整理シート』の活用にあたって、個別の指導計画の「自立活動の指導のねがい」が、その授業とつながらないケースもありました。個人のねがいを考える際に「自立活動の指導のねがい」を確認するとともに、単元を通して見えたその子どもにとって必要な自立活動の内容を、個別の指導計画の「自立活動の指導のねがい」に反映させる必要がないかを検討していく必要があると考えます。
- △『個人のねがい・評価整理シート』をより活用しやすいように、様式の改善をしていきたいと考えます。

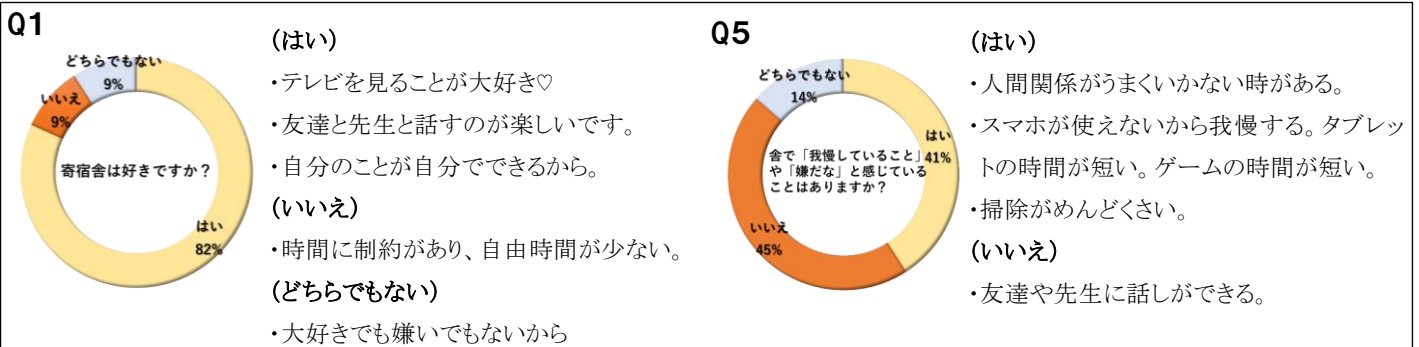
寄宿舎の取り組みについて（今年度、新たに行ったことのみ紹介）

○「ゆとりの週」の設定

昨年度、生活の中での時間的、精神的な「ゆとり」の確保が課題としてあがりました。そこで、今年度は各学期に1週間の「ゆとりの週」をつくり、三人行事（夏まつり、ふゆまつり、おわかれ会）のスタッフ会以外の活動を入れない期間を設定しました。今年度は試行期間として実施し「ゆとりある生活の場」として寄宿舎の環境がどうあるべきかを職員も見直す機会になりました。今後も継続して、「ゆとり」がある生活の中で、子どもたちの行動選択の幅を広げ、主体的な活動につなげていけたらと考えます。

○舎生アンケート（令和5年10月実施）

寄宿舎では学年も発達段階も異なる子どもたちが共同生活を営んでおり、その環境ならではの日課やルール、活動があります。職員側は「主体性」と「ゆとり」を意識して活動や生活を支えようと努めています。しかし子どもたち自身が寄宿舎生活をどう感じているのかを職員に直接的に伝えてくる場面は少ないため、初めて舎生アンケートを実施しました。結果を見ると、おおむね寄宿舎の生活を好意的に受けとめている声が多かったですが、中には、共同生活ならではの「時間に制限があること」への不満や「人間関係」で悩む姿も見えてきました。



【今年度、取り組んだ成果(○)と次年度以降、改善したいこと(△)】

○「舎生のやりたいこと、必要とすること」子どものニーズをベースにして活動づくりを行う意識が強くなった。

「主体的な活動づくり」と「ゆとり」を確保するために、職員の連携が必要であることの共通理解ができました。また、係活動やスタッフ活動など、分掌部ごとに舎生の活動を管轄していることが、舎生の活動を忙しく煩雑にしている可能性があることに気づき始めました。何より子どもが安心して生活できることを一番に考え、検討を始めています。

△会議や話し合いの時間の調整・確保をする。

支援の共通理解や課題解決など、話し合いの時間が足りないことが課題でした。次年度は更に、舎生数が男女棟で大きく偏り、これまでの活動の進め方では厳しいため、効率的に行う必要があると考えます。

△子どものニーズに合わせた、係活動やスタッフ活動の見直し、改善を図る。

生活の中での子どもの活動内容の見直しと時間の調整、「ゆとり」を確保しながら一人ひとりの主体性をどう捉え伸ばしていけるか、再度「見取り」を確実におこない、活動を考えていく必要があると考えます。